

## 「作品の価値について考察する」学習指導

類型化したパターンに焦点をあてた教材化

武久 康高

### 一 はじめに

平成二十一年三月、新しい高等学校学習指導要領が公示された。本稿ではまず、この新しい学習指導要領ではどのような古典の学習指導が目指されているのか確認する。次に、そうした古典の学習指導を教室で展開するにおよび、いかなる観点からの教材化が考えられるのか、その一例を示したい。

### 二 新しい高等学校学習指導要領における古典の学習指導

ここでは、新しい学習指導要領が目指す古典の学習指導について確認する。そのため、まず学習指導要領中の「古典A」「古典B」の「2 内容」項について簡単に整理してみたい。

【新しい高等学校学習指導要領 古典A・古典Bの内容】

#### 2 内容

(1) 次の事項について指導する。

【表現を味わう―古語、現代語とのつながり】

イ 古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。(A)

【内容読解（語句・構造―意味や内容の理解）】

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。(B)

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。(B)

【内容読解（思想・感情）】

ア ―ものの見方を広げ、人間・社会・自然等を考察  
古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間・社会、自然などについて考察すること。(A)

ウ 古典を読んで、人間・社会・自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。(B)

【内容読解（作品価値）―作品価値の考察】

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。(B)

【伝統と文化への理解】

エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。(A)

【中国との関係―自文化の理解】

ウ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。(A)

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。(B)

※ 【一】 内の語句、およびゴシック体表記は稿者による。

(A) (B) はそれぞれ「古典A」「古典B」を指す。

以上の資料は、新しい学習指導要領「古典A」「古典B」の「2 内容」項について、大まかな学習内容ごとに題【一】で示しているをつけて整理したものである。そこには、古語と現代語とのつながりを理解したり、中国との関係から伝統や自文化への理解を深めるといった内容とともに、特に古典作品の読解に関わって、【意味や内

容の理解】（語句や構成に着目して意味内容を理解する。Bア・Bイ）、【ものの見方を広げ、人間・社会・自然等を考察】（古典に表れた人間、社会、自然などに対する思想や感情をとらえ、ものの見方や考え方を豊かにする。Aア・Bウ）、【作品価値の考察】（内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察する。Bエ）といった学習内容が述べられている。

ここで新しい学習指導要領の特徴として注目したいのが「作品価値の考察」、つまり「内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること」（古典B「2 内容」エ）という学習指導である。これは、現行の学習指導要領にある「文章や作品の表現上の特色を理解し、優れた表現に親しむこと」（古典「2 内容」エ）が、「内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること」と変更されたもので、特に「作品の価値について考察する」という点が大きく異なっている。ちなみに、この変更点以外、現行の「古典講読」「古典」と新しい「古典A」「古典B」との読解指導内容にあまり大きな相違はない。<sup>(注1)</sup>そこから見ても、この「作品の価値を考察する」という学習指導は、新しい学習指導要領の特色ともいえる学習活動といえる。

周知のように、小・中学校の新しい学習指導要領では「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、小学校低学年から「伝統的な言語文化」の学習指導が導入されることになった。この小学校から始まる古典学習指導のゴールこそ、高等学校の「古典A」「古典B」の授業である。とりわけ、この「作品の価値について考察する」という「古典B」の学習は、「価値の考察」という高度な

内容をもって、小学校からはじまる十二年間の古典学習 特に古典作品の読解に関して 到達点ともいえる学習として、カリキュラム上位置づけられているといえよう。

では、この「作品の価値について考察する」という学習指導は、どのような教材を用いることでより豊かに実践することができるのであるか。次節において検討したい。

### 三 「作品の価値について考察する」学習指導例 ——類型化したパターンに焦点をあてた教材化——

古典作品を読んでいると、その設定や展開、人物造型などについてつかの類型化したパターンがあることに気づく。例えばそれは、主人公が人里離れた場所で美女を発見するという話や継子譚・悲恋遁世譚などの話型、「葎の宿の女」といった女性登場人物のモチーフなどがあげられる。こうしたパターンの存在は、当時の物語創作者や読者が共有していた認識のありようを我々に教えてくれるものであり、それらが個々の作品内どのように語られ意味づけられているのかについては、「話型」や「構造」「引用」等の問題と絡め、今までも古典文学研究のなかで様々に論じられてきた。

本稿で提案したいのは、こうした類型化したパターンの語られ方(①作品内部での語られ方、②作品外部での語られ方)に焦点をあてることを通じて、「作品の価値について考察する」古典の学習指導である。

まず①に関しては、これら類型化したパターン 物語創作者や読者

の共通理解に支えられた型 が、それぞれの作品において、どのような立場からいかに語られているのか、その考察を目指す学習指導を提案したい。

そこでは、それぞれの作品における類型パターン<sup>(1)</sup>の語り(誇張されたりずらされたり、他のモチーフとの関わりで意味性が変容されたりなど)を、当時の共通理解に支えられた語り(＝類型化したパターン)と当該作品との〈対話〉の結果、生成されたものとして捉える。そして、そこでの〈対話〉の質 〈対話〉によっていかなる社会や人間への問いかけ・批評がなされているのか をもって、その「作品の価値」を議論していくのである。つまり、それぞれの古典作品内における類型パターンの語られ方に焦点をあてた学習指導といえる。

また一方で、このように現代の教室において、類型化したパターンに焦点をあてる学習をおこなう際には、②のような古典作品外部での語られ方にも考察の目を向ける必要がある。この点に関しては、立石和弘の次の意見が参考になる。<sup>(注2)</sup>

話型分析は、物語叙述のみを対象化するのではなく、物語文学を読み解き、要約した言説をも組上に上せ、その再帰的な相互連関において行われるべきであろう。(中略) 話型分析を作品分析としてのみ行うのでは不十分であり、我々読手もまた物語に緊縛されていることを認識しなければならない。個々の作品分析が、「物語をめぐる物語」の枠組みを相対化し、逆に我々の物語を対象化することで作品の読みかえが可能になるのではないか。

話型分析は、「物語叙述」(＝①作品内部での話型の語られ方)と「物語文学を読み解き、要約した言説」(＝②作品外部での話型の語られ方)の両者を対象とし、その相互連関においておこなう必要がある。それは、我々読み手が「物語に緊縛されている」からであり、「物語叙述」中の話型の分析(＝①作品内部での話型の語られ方の分析)が、我々の認識を縛っている「物語をめぐる物語」(＝共同体に都合のよい物語に要約され、圧縮されて流通している<sup>(注3)</sup> 作品に関する語り)を相対化し、一方でこうした我々をとりまく「物語をめぐる物語」の対象化(＝②作品外部での話型の語られ方の分析)により、「物語叙述」への新たな読みが可能になるという。

例えば、「男主人公が人里離れた場所で美女を発見するという話」や「男が女を盗む話」などの類型化したパターンに関して、教科書のリード文など作品外部ではどのように語られ、いかなるコンテクストに位置づけられているのだろうか。おそらくそれは「共同体に都合のよい物語に要約され」、教室での読みに一定の方向性を与えていることであろう。

そこで、「作品の価値」の考察を目指す古典学習指導では、こうした「物語をめぐる物語」(＝②作品外部での話型の語られ方)についても組上にのせ、「共同体に都合のよい物語に要約され」るなど、その言説の偏向を顕在化させることが必要となる。そうすることで、古典やこの話型について語る言説の枠組みが相対化され、今までの古典に対する自己の認識や向き合い方についても対象化がおこなわれる。そうした局面において、類型化したパターンの語られ方をめぐる、作品と学習者との新たな〈対話〉の場が生み出されるのである。そ

して、その作品と学習者との〈対話〉を通じて、作品と類型化したパターンとの〈対話〉の質を教室で考察していく(＝①作品内部での話型の語られ方の分析)。そこでこそ、「作品の価値について考察する」といった学習が教室で成立していくであろう。

以上、本節では類型化したパターンの語られ方に焦点をあてることを通じて、「作品の価値について考察する」古典の学習指導のあり方を述べてきた。しかし、叙上のことを教室でおこなうに際し、具体的にどのような類型化したパターンが高校生の教材として適しているのだろうか。むしろそれは生徒の状況によってさまざまであろうが、ここでは教材化の基準として

①多くの作品に確認できる

②高校生の比べ読みや調べ学習にも対応できる難易度<sup>(注4)</sup>

③現代の学習者の興味関心にも合致する  
を挙げておきたい。

次節では、以上のような基準に合致していると思われる類型化したパターン(「男が女を盗む話」)を取り出し、問題とするであろう観点について述べてみたい。

#### 四 類型化したパターンに焦点をあてた作品分析 例——男が女を盗む話——

(1)「男が女を盗む話」の表現性——女が合意している場合——  
『伊勢物語』「芥川」や『大和物語』「安積山伝説」、『更級日記』  
「竹芝伝説」などの「男が女を盗む話」は、教材として多くの教科書

に載録されており、高校生にもおなじみの話型といってよい。しかし、この「男が女を盗む話」とは、いったいどのような表現性を担うものなのだろうか。例えば竹村信治は、「中古の文芸テキスト」において「女性掠奪」の物語モチーフ<sup>注5)</sup>は三類型あるとし、それぞれ以下のように述べている。

【Ⅰ型】 女が掠奪に合意している場合

〔古事記〕 速総別王・女鳥王譚、定家改訂以前の『伊勢物語』「芥川」、  
〔源氏物語〕 夕顔・光源氏須磨流謫譚、〔更級日記〕「竹芝伝説」

【Ⅱ型】 終始拒絶している場合（『大和物語』 154段）

【Ⅲ型】 掠奪されて後やがて男を受け入れていく場合

（『大和物語』 155段「安積山伝説」）

※『伊勢物語』「芥川」が【Ⅰ型】に入っている理由

現在、広く流通している本文は定家本系統のもので、その本文の記述でいくと「芥川」は【Ⅲ型】（掠奪されて後やがて男を受け入れていく場合）に分類される。しかし竹村は、「女（の）こゝろ（を）あわせて」（Ⅰ型）が「芥川」本来の本文であり、それを定家が「からうしてぬすみて、」（Ⅲ型）に変えた指摘する（注5竹村論文、九二―九三ページ）。ここでは竹村の指摘に従い、『伊勢物語』「芥川」を【Ⅰ型】に入れておく。

さらにこの【Ⅰ型】について、上代以来の物語モチーフとの相  
同性から、本話型を「政治的事象を（王の女の）掠奪・討伐譚をもつて語る物語類型の「ヴァージョン」であるとし、定家改訂以前の

『伊勢物語』「芥川」（Ⅰ型） 女が掠奪に合意している」の叙述中には

① 女をとり返した側に立つて語られる場合

政治的対立者排除の正当化、王権の聖性担保にむけた王権の側からの語り

② 女を盗んだ側に立つて語られる場合

排除される者への「共鳴共感を誘う」語り

の二つの立場からの語りがあるとすると。そして「芥川」後半の解説部分を①に該当する。王権の側からの語り、また前半の歌物語部分を②にあたる。敗者の心情への共鳴共感を誘うかたちで語られた「業平韜晦の自己語り」だと論じている。

たしかに「芥川」後半の解説部分では、女がのちの后・鬼が基経国経とされ、この兄弟に高子がとり返されたことが示されるなど、王権の側からの語りと呼ぶにふさわしい語りとなっている。また前半の歌物語部分でも、男の歌に託された「女を失った嘆き」を主題とし、その主題の再現にむけて叙述がなされるなど、男の心情に寄り添った語りが展開されている。なるほどこれは、排除される者への「共鳴共感を誘う」語りといえよう。

このように竹村は「男が女を盗む話」とりわけ「女が掠奪に合意している場合」について、その語りと上代以来の物語モチーフ（『古事記』速総別王・女鳥王譚など）との類型性から、当該モチーフが担う政治的意味を『伊勢物語』「芥川」段のなかに見①②、その表現性について検討しているのである。

## 〔2〕教科書教材『伊勢物語』『芥川』の表現性

しかし、以上のように定家改訂以前の『伊勢物語』『芥川』の表現性を見定めるとしても、現在教科書にとられている本文は定家本系、つまり合意なきまま女が掠奪された（Ⅱ男が女を「からうじて盗み出でた」とされる本文である（Ⅱ型）、あるいはⅢ型）。そのため教材分析は、こうした記述をもつ定家本系本文（以下、「教材本文」とする）に對して行われなければならないまい。では、合意なきまま「男が女を盗む」といった類型パターンは、この教材本文の中でどのような表現性を担うのだろうか。

前述したように、教材本文「芥川」の前半は歌物語となっており、歌に託された男の心情が本話の主題である。そのため歌に至るまでの物語部分では、そうした主題の再現にむけた叙述が、男への「共鳴共感を誘う」語りによってなされていく。本話でいえば、やつとの思いで手に入れた女を失ってしまう男、その男の一途さや嘆きが主題化されているといえよう。すなわち、教材本文前半は男の心情に寄り添った物語なのである。

だが注意したいのが、教材本文での男は【Ⅰ型】（女が掠奪に合意している場合）とは異なり、合意なきまま女を掠奪している点。つまり別の視点から読めば、教材本文は突然男に拉致されてしまった女の話ともいえるのである。

しかし、教材本文からはそうした悲惨な女の姿は見出しにくい。なぜなら、教材本文前半は男の心情に寄り添った歌物語であるため、男はあくまでも愛する女を失った被害者として語られるからである。つまり、ここでの「男が女を盗む話」は、男の心情に寄り添って語

られるがゆえに「純愛」や「悲恋」として意味づけられ、そこでは真の被害者である「盗まれた」女の心情は忘却されているのである。

なお、こうした教材本文の意味づけは、作品外部での話型の語られ方（物語文学を読み解き、要約した言説）とも連動していると思われる。例えば、教科書の挿絵としてよく用いられている「伝俵屋宗達『伊勢物語図色紙』」。ここに描かれている見つけ合う男女の構図は、両者に確かな愛情があることを印象付ける。そのためこの挿絵の存在は、「盗まれた」女側に立った教室での読みを困難にするだろう。

また教科書ガイドでも、「本文に『盗み出でて』とあるが、女の意志を無視したものではなく、女も心を許していたことは、闇に光る露について男にあどけなく尋ねていることで分かる」（東京書籍『国語総合（古典編）教科書ガイド』など、ここでの「男が女を盗む話」がお互いの合意によるものとして説明している。こうした言説の存在が、教室で男の心情に寄り添った読みを形成する一要因となっているといえよう。

加えて、教科書によつては後半の解説部分を省略しているものがあるが、こうした処置も、教材本文を男の心情に同化した「純愛」や「悲恋」話として読もうとする欲望と結びついている。なぜなら、解説部分は前半の歌物語部分の記述を対象化する語りを持つゆえ、それらを並置することで、歌物語部分の語り（Ⅱ男への「共鳴共感を誘う」語り）が対象化され、その語る立場をも明らかにする可能性があるからである。そのため例えば、解説部分の語り（「かたちのいゝめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりける」（Ⅱ美人だったので盗んだという、男の好色性を表す）や「いみじう泣く人のあるを聞きつけて」（Ⅱ

連れ去られた女の悲しみを表す」など」と前半部分とを比較し、それぞれの語る立場の違いを明らかにすることで、男の行為を「純愛」として語る、歌物語部分の言説の偏向を顕在化させることも可能となるだろう。

以上、(2)では、教科書教材『伊勢物語』『芥川』における「男が女を盗む話」の語られ方を見てきた。ここでは、本話は合意なきまま女が掠奪された(「男が女を」からうじて盗み出で)たパターンとなっているにも関わらず、前半の歌物語部分では男の心情に寄り添った叙述がなされているため、男の行動が一途な「純愛」に基づくものとして語られ、さらにそれが「盗まれる」女の心情への忘却を促す言説ともなっていることを指摘した。また、同様のことは、教科書の挿絵や教科書ガイドの記述にも見られ、これら作品外部の言説も学習者の読みを方向付けるものとなっていることを確認した。そのため、「作品の価値」の考察を目指す古典の学習指導では、それぞれがどのような立場からいかに語られ、それがいかなる効果を生んでいるのかについて学んでいくような指導が必要であると考えられよう。

### (3)『大和物語』154段、『源氏物語』柏木の恋

ところで、以上のような教科書教材『伊勢物語』『芥川』の位相は、他作品と比較することでより明らかとなる。例えば、『大和物語』154段は、「京より来たりける男」が「いと清らにてありける」大和の女を垣間見て、「盗みてかき抱きて馬にうちのせて逃げ」る。その後、女は龍田山に連れて行かれて乱暴され、その場で歌を詠んで死んで

しまう。本段は以上のような話であるが、ここでは「いとあさましくおそろしう思ひけり」、「女、おそろしと思ふことかぎりなし」など、盗まれた女の心情が縷々語られており、「男が女を盗む」行為の持つ暴力性が露わにされている。また、歌を詠み息絶えた女を見て、男は意外なこととして驚き涙している(「いとあさましくてなむ、男抱きもちて泣きける」)のだが、この驚きの叙述には、「女を盗む」行為において、いかに男が自分勝手であり女の心情に無頓着であるか、という語り手の批評が込められているといえよう。

また、同様の例としては『源氏物語』の柏木と女三宮の密通についての語りをあげることができる。<sup>(注6)</sup>

女三宮を偶然垣間見た柏木は、「わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと契りうれしき心地」(新編全集『源氏物語』④「若菜上」一四四)がする。女三宮を垣間見できたことで、自分の恋情が報われる前兆だと一方的に解釈するのである。むろんここでの柏木には、垣間見による恋の始まりと成就<sup>④</sup>という、王朝物語における男主人公の類型化したパターンが意識されているよう。

その後、思いを募らせた柏木は、「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日はながめ暮らさむ」(『伊勢物語』九九段)を引いた手紙を女三宮に送る(④「若菜上」一四八)。この歌は業平から二条后への歌とも伝えられており(「見もせぬ人の恋しきは」など申すことも、この(業平と二条后の)御ならひのほどこそはうけたまはれ」新編全集『大鏡』二九)、柏木が高貴な女(二条后)を盗む男主人公(業平)に自己像を重ね合わせていたことがうかがえる。

そして密通の時、女三宮を見た柏木は理性を失い、「いづちもいづ



ちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れ」る(④「若菜下」二二六。昔男よろしく、柏木はここで高貴な女(女三宮)を盗むことを思うのである。さらに同衾後、柏木は自分への共感を女三宮に求める。業平と二条后との関連から考えると、これは互いに心通わせる男女(女(の)こ、ろ(を)あわせて)に自分たちの「恋愛」を重ね合わせようとする行為として捉えられるが、それに対して女三宮は沈黙を続ける。すると柏木は、宮を「かき抱きて」格子の所まで行き、「すこし思ひのどめよと思さば、あはれとだにのたまはせよ」(④「若菜下」二二八)と、さらに「あはれ」の共感を求め続けるのであった。だが、女三宮から共感の言葉が漏らされることは最後まででない。

密通後、源氏に露顕したことを知った柏木は病がちとなり、ついには死へと向かっていく。そうした柏木が、最後まで女三宮に求め続けたのが自分への共感であった(④「柏木」二九二)。だが女三宮は、「おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど」(④「柏木」二九二、柏木の恋心については、最後まで「うたてにのみ思」っているのである(④「柏木」三二九)。

以上のような柏木の恋を、「男が女を盗む話」との関連からまとめれば次のようになるだろう。柏木は、自分と女三宮との関係を、業平と二条后との関係に重ね合わせようとした。そのため、女三宮にも二条の后のような、男の気持ちへの共感(女(の)こ、ろ(を)あわせて)【I型】を求めるのだが、それは結局、男にとって都合のいい幻想を女に強要することではしかなかった。「盗まれる」女三宮にとって、そんな男に押し付けられた幻想は迷惑なことではしかないの

である。つまりここでは、そうした「男が女を盗む話」に関わる「恋愛」の幻想に囚われた男の姿が批評的に描かれているといえよう。

#### (4)『源氏物語』紫の上の人生

教科書教材である『伊勢物語』「芥川」、また『大和物語』154段、『源氏物語』の柏木の恋をみて明らかなのは、「男が女を盗む話」は男の立場から語られており、「盗まれる」女の側に立ったものではないということである。そのため男たちは、容易にこの類型化したパターンに同化し、同じような幻想に生きようとする。では、女たちは、この「男が女を盗む話」とどのように〈対話〉していったのであろうか。こうした問題を考えるにあたって、『源氏物語』における紫の上の語られ方は参考になる。この点については立石和弘の的確な指摘があるので、以下引用してみたい。

歌物語の嫁盗みは、女が死んで終わるのが常套であった。『源氏物語』の若紫掠奪は、そうした物語の定型を踏まえながら、その後に女が生き延びたとき、どのような生がありえるのかを描いている。そうした意味で、ひとつの実験であったと言える。／「思い通りになる女」という幻想と向き合い、その欲望に応え続けてきたのは、正式な結婚を拒まれ、強引に連れ出され、屋敷に据えられることで、夫以外に身を置く場所を失ったからであった。理想的な妻としての端正な振る舞いも、理想的であらねばならぬ事情があった。／物語はそうした環境を設定することで、求められている役割を演じ、男の幻想と向き合いなが



ら、やがて、それと齟齬をきたし、そこからこぼれ落ちる内奥を抱え込む紫の上を浮かび上がらせていく。／紫の上の内面を通して批判され、相対化されていくものは、男社会にあつて、物のようにして扱われる女、思い通りになる存在として扱われる女の位置づけであり、まさしくそれは、掠奪する男の幻想そのものであった。

立石の指摘で注目すべきは、紫の上の人生とは「盗まれた女」のその後であり、作品ではそうした女に「どのような生がありえるのか」が描き出されているとする点である。

前述したように、「男が女を盗む」行動は、「盗まれた女」の側への配慮を欠いた、男の幻想ともいうべきものに支配されていた。そして、そうした「盗まれた」後の環境（＝正式な結婚ではない状態）を女が生き延びていくためには、男の「思い通りになる」「理想的な妻」にならざるを得なかったのである。だが、そのようにして「男の幻想と向き合い」、「思い通りになる女」として生きてきた紫の上も、やがて「齟齬をきたし、そこからこぼれ落ちる内奥を抱え込んで生きていくことになる」。

こうした紫の上の姿を通して作品で批評されているのが、そのように女を扱っていく「男の幻想そのもの」であり、さらにそこから女には「どのような生がありえるのか」という問いが、作品から読者に投げかけられているのである。ここには、「男が女を盗む話」といった類型化したパターンと作品とが〈対話〉をし、その結果、社会や人間への問いかけ・批評がなされる、そうした局面を見出すこ

とができよう。そして、このような〈対話〉によって問いの深まりが見られる教材にこそ、その「作品の価値」を見て取ることができ、新しい学習指導要領が目指すような学習を、教室でより豊かに実践しうるのである。

## 五 おわりに

最後に本稿の内容を簡単にまとめたい。本稿では、新しい学習指導要領が目指す古典指導の特色として「作品の価値について考察する」という学習があることを確認した。次に、そうした学習をより豊かに実践するため、類型化したパターンの語られ方（①作品内部での語られ方、②作品外部での語られ方）に焦点をあて、そこでの〈対話〉のありようを考察する学習を提案した。さらに、その例として「男が女を盗む話」を取りあげ、分析の視点を提示した。今後は、こうした教材化によっていかなる授業展開が考えられるのか、さらに考察を深めたい。

付記 本研究は、文部科学省科学研究費補助金（基盤（C））（課題番号21530949）の助成を受けたものである。

### 注

1 これ以外の大きな違いとしては、新しい学習指導要領の「古典A」の「内容」において、現行の「古典講読」の「内容」にはなかった、「エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な

資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること」という学習内容が追加されていることが挙げられる。これは、小・中学校の新しい学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されるといった、「伝統的な言語文化」の指導を重視しようとする新しい学習指導要領の方針があらわれたものといえる。

2 立石和弘「女性拉致の話型組成」(『国文学』第五〇巻四号、学燈社、二〇〇五、六三ページ)

3 注2立石論文、六三ページ。

4 新しい学習指導要領「古典A」「古典B」の「内容」においては、古典の読解に関わる指導例として、時代や題材を同じくする古典作品との読み比べ(Aウ・Bイ)や文章中の表現を根拠とした話し合い(Bウ)、課題の設定・調査・報告(Bエ)などの活動が例示されている。

5 竹村信治「伊勢物語『芥川』段小考」(『国語教育研究』第四八号、二〇〇七・三、九二ページ)

6 柏木の物語と「男が女を盗む話」との関わりは、王権の問題や柏木の政治的な位置づけなど問題とすべき点は多い。しかしここでは、身勝手な男の幻想にとらわれている側面についてのみ取りあげている。

7 立石和弘『男が女を盗む話 紫の上は「幸せ」だったのか』(中公新書、二〇〇八・九、一五八―一五九ページ)